
小説『彼女と夏と僕』

やおたかき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

小説『彼女と夏と僕』

【Nコード】

N2132E

【作者名】

やおたかき

【あらすじ】

夏休みの登校日。そのとき一瞬、真夏の暑さが、熱から香りへと、化学変化でもおこしたかのような、錯覚すらして……。僕と彼女の、ある一日の物語。河下水希先生のマンガ原作を単純に小説化したものです

(前書き)

河下水希先生のマンガ作品を単に小説化したものです。ネタバレ注意。先に原作をお読みになることを特にお勧めします。

小説『彼女と夏と僕』

「だーれだ？」

いきなり柔らかい手が、後ろから僕の目を隠す。「わたしはだれ？」と、試すだなんてとんでもない。この声、この手の感触、僕にとつてかけがえのない人のもの以外の、なにものでもない。

夏休みの登校日。そのとき一瞬、真夏の暑さが、熱から香りへと化学変化でもおこしたかのような、錯覚すらして。

ふり返ると、木漏れ日の中、その人は眩しくほほ笑んでいたのさ。

「ナツミ先輩……」

年上の人。そして僕の 僕の カノジョ

シャツの胸元を軽くはだけ、タイを崩れた感じにぶらさげて。制服のスカートは短く。露出された肌が僕には輝いて見えて。

その引き込まれそうな澄んだ双つの瞳で、ぶざまに視線をさまよわせている僕の顔を、意地悪っぽくのぞき込んでくるのだ。

「デートしよ！」

僕が息をつまらせて返事ができないでいることをいいことに、カノジョはさらにたたみかけてくる。

「海につれてつてよ！」

海

センパイと、海

その瞬間、僕の脳裏には、白い浜辺に滑るように打ち寄せる波と、センパイのその姿の映像が広がり

意識がかすれかけたのは、夏の暑さのせいに違いない。

「あつーい」

センパイの首筋を、汗の粒が、すす、と滑る。

「なんで自転車あるのに 歩いて行くわけー？」

こっそりと盗み見るセンパイの横顔は、年上なのに、逆に幼くさえ見えて。だから。

「自転車の二人乗りは 交通違反だし……」

と僕はぐずぐず言い訳をするのだ。

「ふーん……」

告白をしたのは、夏休みの前だった。

「随分マジメねー」

OKをもらえただけでも、驚いているのに、二人乗りなんかしちやったら。

「ま いっけど」

カラダが密着しちゃうじゃないか。

……そりゃ、してみたいけど、さ。

「あつ 海！」

センパイが、駆け出した。

僕たちの学校は、歩いていけるほど近くに海があつてさ。

だけど、いつも波が荒くて、泳いではいけないことになっているのさ。

だから、このときも、僕たちのほか、誰もいなくて、さ。

「うーん 潮風……」

気持ちいい、とセンパイは両腕を伸ばし、カラダを反らして、さ。

後ろから見ている僕は顔を赤くさせたのさ。どうしても、センパイは。

やっぱ かわいい から !

そしてそのとき、いたずらな風が吹いたんだ。

あわててスカートを押さえるセンパイ。

シリアスな表情で、軽く睨むセンパイ。

「パンツ見えた？」

見えた。

「え……いや！ 見てない！ 見てないよ！」

ハッキリと網膜に焼き付いた。白いパンツ。布地から半分以上はみ出たお尻のお肉まで！

「へーっ ほーっ」

センパイは信じてくれず（ま、そうだろうけど）、わざとらしい声を出し

突然。

とびきりにいいコト考えついた、というふうに、僕を困らせる笑顔になり。

「別に 見てもいいよ」

スカートを、脱ぎはじめたんだ！

じつに思い切りよく、ストンと、スカートを地べたに落とし。

シャツにパンツという姿。もう、惱殺的な光景を僕に見せつけてそのシャツも、ボタンを下から外していくんだ。

おへそが見えて。

制服のタイが、白いブラの谷間から、ハダカの肌にはぐらさがっていて。

1年大人な、センパイのカラダ……。

（う……うわあ~~~~っ！！！！）

顔を真っ赤にさせて、がばつと後ろを向く、可哀想な僕だったのさ！

センパイのからかうような笑い声。

「バツカねー 水着だよ水着」

え……？

「下に着ておいたんだよね」

滑稽なくらい、おそろおそろ振り返った先に。センパイの

センパイの

「じゃーん」

ナツミセンパイの、夢にまで見た、ビ、ビキニ姿が
うっとう……。

センパイ、まだ、制服の黒ソックスも靴も脱いでいないじゃない
ですか！ あの、その格好、マジやばいっス！

だけど、センパイは。そんな僕の慌てようなんかそれこそ意にも
介さないでさ。

「似合う？」

KOさすような笑顔を見せたんだ。

「でもココ 遊泳禁止だけどね」

そう言いながらも、逆に靴下を脱いでいくセンパイ。

前屈したために、乳房がたわわになっさ

！

(だ ダメだよっぱり！)

僕の心臓は、もう破れんばかりになって。

「あっ 目をそらした！」

かんべんしてください。

「もーっ」

と、機嫌を損ねてしまうんだ。

でも、わかってくれるだろう？

恥ずかしくて、見れないよ。

ジロジロ見て、スケベだと嫌われたくないよ。

てゆーか僕。

全然自信がないんだ。

僕…… 本当にナツミ先輩の彼氏なんだろう？

だって、僕は一度も先輩から、好きって言ってもらってない……。と、そんなふうには、半分、惚けていたときなんだ。大波が

人の背丈を軽く超える大波が

センパイは、持ってきた鞆に気を取られていて

「危ない！」

叫んでいたときにはもう、駆け出していたのさ。

目の前でセンパイは、波に飲みこまれて

僕は、センパイには間に合ったけど。

鞆の方が

「あたしのバッグ」

波に攫われてさ。

「取ってくる！」

なんとか沖に持って行かれる前に、取り戻したんだけど。

もちろんぐしょぬれで。

センパイは、落ち込んでしまった

「何か大切な物でも 入れていたの？」

「うん」

そしてセンパイはこう言ったんだ。

「クッキー焼いてきたの 君に食べてもらいたくて。 ……でも、

もう……」

僕は、本当に嬉しくなっちゃったんだよ！

「食べるよ食べる！ 先輩が作った物なら何だって食べる！ あーあったコレだ！ 確かに水びたし、いや！ でもおいしそう！ うん、しょっぱいけど、うん、おいしい！ 塩分と糖分が微妙なバランスで混ざり合って、全然イケるよ！ ナツミ先輩は、料理上手なんだなあ！」

嘘じゃない本当なんだ。もうガツガツとたいらげたのさ。

そしたら、センパイは、僕のカノジョは、とっても幸せそうな顔で、僕にこう言ってくれたんだ。

「ありがと だいすき……！」

波が鳴ったね。ザンツてさ。

「きゃっ……」

センパイは恥ずかしそうに両手で赤い顔を隠してさ。

「うそ……」

僕なんか、目を丸くさせてさ。

最初耳を疑ったよ。だけど、じわじわっとさ。

センパイは、可愛くてさ。

じわじわと

センパイは、まだ恥ずかしそうに顔を隠していて、さ。

「　　しゃああああああああっ！」

もう、沖に向かってバシャバシャと泳いじまったよ。マジ、たっ

た今、死んだっていいって、思ったくらいだったのさ。

「ちよつとココ　遊泳禁止だよーっ」

センパイの声が聞こえる。

センパイが笑顔になっている。

ああ

僕は、センパイとのこの恋を、多分なかなか進展させてあげられないだろうけど

そうなのさ。

とりあえず今日の帰りは、カノジョと自転車二人乗りしようって、決めたのさ！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2132e/>

小説『彼女と夏と僕』

2009年6月6日23時01分発行